

河北地方で制作された法界仏像について

易丹韵（早稲田大学）

法界仏像とは、体軀や大衣に須弥山や六道衆生など仏教的世界を構成する様々なモチーフが表現された、特異な如来像である。この種の像は、六世紀頃から十三世紀頃にかけて制作されており、それらの地理的分布が中央アジア（西域北道、南道）や敦煌、華北（河南、山東、河北、山西省）などかなり広い範囲にわたっている。

本発表では、河北地方（今の河北省がその大半を占める）で制作され、現在それぞれボストン美術館とサンフランシスコ・アジア美術館にある法界仏像の石像の両作例（以下ボストン美術館像、アジア美術館像）を取り上げ、両者の制作時期を再検討することとしたい。また、それらの体軀・大衣に彫出された図像内容についても考察を加えたい。

ボストン美術館像とアジア美術館像は、いずれも体軀・大衣に天界、須弥山およびそれを隔てて対坐する維摩詰と文殊菩薩、釈迦の入涅槃、そして地獄界などが上から下へ順に表現されており、ほぼ同様の図像内容を持つのである。

アジア美術館像には銘文が刻まれていない。その制作時期を考察するに際しては、形式・様式の分析による時期比定がなされているが、唐代の制作と遼代の制作の両説が対立している。

一方、ボストン美術館像には銘文があり、特に制作地が刻まれた箇所は残存している。その制作時期については、当該地名の使用が開始されてから廃止されるまでの期間を手掛かりにして、それを盛唐末頃から唐末にかけての時期の制作とするという李静傑氏の説があり、しかもいまのところ唯一の論考である。

ただし、ボストン美術館像の銘文に記されている地名の使用が廃止された時期については再検討の余地がある。同地名が五代から宋初にかけての時期も存続していたことは、宋元時代に成立した地誌や政書などの諸史料から確認できる。この像については、地名変遷の考察によって時期比定を行うと、盛唐末頃を制作時期の上限、宋初を下限とするという結論しか導き出し得ない。

そして、アジア美術館像の制作時期を考えるに当たっては、同像に盛り込まれた人物のモチーフが手掛かりになる。これは先行研究の視野に入って来なかった。当該人物を有する作例がすべて宋・遼時代になってから見られるようになったことに鑑みると、アジア美術館像の制作時期の上限が唐末五代に遡ることが困難であると指摘したい。

両作例の図像内容については、同様に須弥山を隔てて対坐する維摩詰と文殊菩薩が表現された初唐期の法界仏像もあれば、それらにみられる図像配置上の変化を反映した盛・中唐期の法界仏像もある。よって、両者は、初唐以降における法界仏像の新しい展開という文脈の中で見るべきものである。要するに、河北地方で制作された両法界仏像は、初唐以来の法界仏像の図像に大きな影響を受けながら、独自の発展を遂げたものと認められる。